

主 題：救われた者への神の祝福 1

聖書箇所：ローマ人への手紙 5章1－2節

ローマ5：1－2をご覧ください。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。：2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」、1節の最初に「ですから」ということばがあります。これは「だから、それゆえに、そのようなわけで」という意味をもった接続詞です。明らかに、パウロはこれまでに話して来たことを受けて、この5章からまた新たに大切なことを教えようとするのです。1章から4章を通して、彼はすばらしいことを教えて来ました。それは「義とされる」ことでした。言い変えると「救われる」ということでした。私たちはもうすでに学んで来ました。その大切さをパウロは語り、そして、このすばらしい救いは私たちが何か良い行ないを為したからではなく、信じる信仰によること、その信仰によって私たちはこの救いを自分のものにすることができるのだと、そのことを学んできた訳です。特に、3章21節から4章の終わりまでにそのことが記されていました。そのことを話して来たパウロは、この5章からは、その義とされた者、救われた者が神から与えられた救いを永遠に失うことはない、この与えられた救いは永遠に続くものだと教えるのです。これは「救いの保証」とでも言いましょうか、そのことをパウロはこの5章から8章を通して教えるのです。一度救われたらその人は永遠に救われているのです。救われた人が救いを失うということは聖書の教えではありません。神は救われた者は永遠にその救いを失うことはないと保証してくださっているのです。

今、私たちが学ぼうとしている5章1節から、まずパウロは、救われた者に与えられたすばらしい祝福を挙げています。罪赦された者、義とされた者に神が約束されたすばらしい祝福です。そして、8章の最後には、この救いは絶対に失われることがないことが教えられています。ゆえに、救われたことによって神からいただいた祝福を失うことは絶対にないと言うのです。5章と8章に挿まれている6章と7章には何が記されているのでしょうか？実は、6－7章を見ると、この救いというすばらしい祝福の確信を私たちから奪って行ってしまう、その誘惑を挙げているのです。6章では「罪」のことが話され、7章では「律法」について話されています。パウロはあえて、そのような誘惑を挙げることによって、信仰者一人ひとりがそのような誘惑に負けて、救いの確信を失ってしまうようなことがないように、そのことを願って、あえて6章と7章をそのような形で記したのです。

「私は救われている」と強い確信を持っていたとしても、現実には、その救いの確信をときに失ってしまうのが私たちではありませんか？ここにおられる信仰者の皆さんが、今までの信仰生活の中で、本当に救われていると確信しているにもかかわらず、あるときにその救いの確信を失ってしまうことがある。恐らく、一度や二度、そのような経験をなさった方はおられることでしょう。パウロはそのことを知っています。私たちがいかに弱者であるかを知っているのです。そのような誘惑を私たちが経験するというを知っています。この手紙を読む読者たちの中にそのような人々が多かったから、パウロは「救いを疑うことがないように」と勧めるのです。ではなぜ、そのことが起こるのでしょうか？

◎救いの確信を失わせるもの

1. 聖書の知識が乏しいから

一つは聖書的な知識に欠乏しているなら、救いの確信をすぐに失ってしまいます。なぜなら、私たちの周りにはいろいろな教えがあふれているから、それに惑わされてしまうのです。キリストという名の教えでも、すべてが聖書に基づいたものであるかというところとそうではありません。ですから、いろいろな教えが入ってくる現実に、パウロ自身がそのことを警告したのです。終わりの時代になるといろいろな教えが入って来て惑わされる、惑わされた人々はすぐに感情の虜になってしまい、自分の心の中で「私はどうも救われていると思えません」と、そのように疑い始めてしまうのです。そのような誘惑に負けないために、私たちは私たちの信仰の土台をしっかりとこの神のことばである聖書に置かなければいけません。

2. サタンの存在

もう一つ、私たちがこの救いの確信をすぐに失ってしまい、もしかすると救われていないのではないかと思ってしまう原因は、そのように望んでいるサタンという存在がいるということです。この神の敵であるサタンは、常に神に対して信仰者が疑いを抱くように働き続けて来たとし、これからも神が許しておられる間、その働きを為し続けます。人々を誘惑し惑わし続けます。だから、義とされた人々、すなわち、救われた人々がそのように救いを疑ってしまうということが起こり得るのです。

◎私たちが決して忘れてはいけないこと

パウロはそのようなことを知った上で、信仰者一人ひとりがその信仰の確信をぐらつかせることなく、しっかり確信を持って歩み続けて行くために、この5章から教えを始めて行くのです。私たちはこれからそのことを学んで行きますが、一つ、大切なことを覚えておいてください。私たちが信仰の確信をぐらつかせないためには「神の愛」を絶対に忘れてはいけないということです。パウロは、実はこのみことばの中で繰り返して「神の愛を覚えなさい」と私たちにチャレンジします。そのことが私たちに必要だからです。というのは、この5章の最後21節を見ると「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」と書かれています。原文をそのまま訳すと「私たちの主イエス・キリストによる永遠のいのちをもたらすために、」となります。今注目したいのは「私たちの主イエス・キリストによる永遠のいのち」ということばです。6：23には「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」とあり、同じような終わり方をしています。7：25には「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」、8：39にも「高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」とあります。すべての章の終わりが同じように終わっていることに気がきます。5－8章の各章の終わりはすべては結局、神の恵みに感謝しているのです。ですから、パウロはこの5章から8章で、繰り返して私たちに「いいですか、クリスチャンの皆さん、あなたがどれ程神に愛されているのかを忘れてはいけない」と言うのです。よく考えてみると、私たちの信仰生活において信仰がダウンしているとき、落ち込んでしまっているときは神の愛に感謝しているでしょうか？神の愛に感動していますか？神の愛に喜んでいますか？どちらかというとその逆です。神の愛に感謝をしない、そのようなときは残念ながら私たちの信仰も落ちているのです。

パウロは義とされたあなたに、救われたあなたに神が与えてくださった祝福がどのようなものかを教え、そして、その祝福は永遠に続くものだから、しっかりと惑わされなくてその確信に立って歩んで生きるようにと、そのことを教えようとするのです。この「ローマ人への手紙」を学んでいると私は本当に神のそのみことばのすばらしさ、神が言わんとしているメッセージのすばらしさにいつも感動を覚えます。クリスチャンの皆さん、これから私たちはどのようにすれば私たちの信仰がぐらつかずに強固なものになって行くのかを学んで行きます。ごいっしょにしっかりと見て行きましょう。まず、私たちが見るのは5章の初めのところからです。パウロはこの1－2節で、義とされた者たち、すなわち、救われた私たちに与えられた三つの祝福を挙げています。それを今から見て行きましょう。

☆救われた者に与えられた三つの祝福 5：1－2

1. 神との平和 1節

まず一つ目の祝福は、この1節にある通り「神との平和」です。救われた私たちに神は「神との平和」を与えてくださったのです。ここにある「平和」とは、考えや心の状態を指しているものではありません。私たちの心が平和に満たされているとか、平安であると、そのようなことではないのです。ここで言われている「平和」とは、離れていたものがいっしょになることです。しかも、この「平和」ということばは5章の10－11節に出ている「和解」ということばと関連していることが分かります。5：10－11「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。：11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」。ここにある「和解」と1節にある「神との平和」は、当然、深く関連しています。元々そうではなかったのに、罪によって破壊されてしまった神と人間との関係を、実は、私たちは修復しなければいけないのです。しかし、残念ながら、多くの人々はその神との平和の必要性を感じていません。

◎なぜ、多くの人々は神との和解を受け入れないのか？

私たちがすでに学んだところ、ローマ3：17には「また、彼らは平和の道を知らない。」と書かれました。つまり、人間は神との平和の必要性を微塵も感じていないということです。だれもその必要を感じないのです。なぜでしょう？

1) 自分の存在が分かっていないから

人間は自分が神の前にどのような者かが分かっていないのです。神によって造られた者であること、また、人間はその創造主なる神に対してどのように生きるかということに関して責任があること、また、いずれ必ず、自分の人生の清算を神の前でしなければならぬということを考えないのです。それで人間が考えることは、どのようにして自分を楽しませるか、どのようにして自分を満足させるかということです。神に対する恐れがないのです。だから、彼らは神との平和が必要だなどとは思ってもいないのです。皆そのように生きているし、そのように生きるのが人生ではないのか、楽しいときに楽しんで、

好きなことをしてそれで終わり。人々は神との平和の必要も感じないし、もっと言うなら、神との平和を拒んでしまっているのです。なぜなら、その理由は人間は自分の存在が分かっていないのです。自分が神の前にどのような者であるかが分かっていません。聖書によれば、人間は皆生まれながらにこのような者だと教えています。**(1) 神の敵である**＝ローマ5：10「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」、人間は例外なく神に逆らい神の敵である、神の敵として生き、神に逆らい続けているのです。ゆえに、神の敵として相応しいさばきを受けるのです。生まれながらに人間は皆例外なく、神の敵として生まれ、神の敵として歩んでいると言うのです。**(2) 悪魔の子どもである**＝二つ目に聖書が私たちに教えることは、人間は皆生まれながらに悪魔の子であるということです。イエスがヨハネの福音書8：44でこのようなことを話されました。「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、…」と。非常に厳しいことを言われました。人間は生まれながらに皆例外なく、悪魔の子どもとして悪魔に仕え、神に反抗し続けているのです。ゆえに、悪魔とともに永遠のさばきを受けるのです。神の敵である人間が、サタンの子ともである人間が、どのような運命を辿っているのかということは明らかです。神に逆らい続け神に背き続け神の前に罪を犯し続けている者が、どのようなさばきに服するのか、そこに待っているさばきはどのようなものでしょう？神の敵に相応しい、悪魔の子どもに相応しい永遠に尽きることはないさばきです。人間は人と自分を容易に比較します。でも、神が私をどのように見ておられるのかということは考えもしないのです。神は私たちのことをそのように言われていたのです。しかし、感謝なことに私たちクリスチャンはそこから救い出されました。生まれながらの人間はすべて神の敵であり悪魔の子であると、そのことが分かっていなければ、私たちは神と和解することが必要だということなど考えないのです。神はそのように言われ、私たちに警告をしておられるのです。

2) 自分自身の将来が分かっていないから

自分の真性が分かっていないだけでなく、もう一つ、自分の将来が分かっていないのです。どういうことでしょうか？神は私の罪に対して怒っておられるということが分かっていないのです。神はどんな小さな罪であっても、それに対して怒りを持っておられる、そのようなことを私たちは余り考えません。「皆がしていることだからいいじゃないか」と言うのです。私たちがすでに見たように、ローマ2：5-6には「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。」とありました。神は罪に対して怒りをもっていると言うのです。しかも、その罪に対して神は必ずそれに相応しい審判を下すと言われるのです。しかしながら、この世は私たちにそのようなことは言いません。その逆のことを言います。「楽しければそれでいい、好きに生きればいいのだ、死んでから先のことなど分からないではないか」と。パウロはそのことを警告しています。エペソ人への手紙5：6「むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、…」、何のことでしょうか？様々な不品行、様々な汚れです。それは実際に行動を起こすことだけでなく、ことばにおいてもその通りです。行ないによる罪、ことばによる罪、いかなる罪に対しても神はその罪を憎んでおられます。私たちが行なったことに対して責任を取るの自分であり、私が語ったことに対して責任を取るの自分自身です。だから、パウロは言うのです。「むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。」、神に逆らい続ける者たちに対して、神は必ず容赦ないさばきを下すと言うのです。その罪に相応しい正しいさばきを…。「死んでから先のことはどうなるか分からないから先のことなど考えなくてもいい」と言うなら、聖書はそのことをはっきりと教えていることを知るべきです。死んでから先どうなるのか、一人ひとりが神によってさばかれるのです。その罪がさばかれるのです。

詩篇にはこのように記されています。詩篇7：11-13「神は正しい審判者、日々、怒る神。：12 悔い改めない者には剣をとぎ、弓を張って、ねらいを定め、：13 その者に向かって、死の武器を構え、矢を燃える矢とされる。」、非常に厳しいことを私たちに教えています。多くの人々はこのことが分かっていないから、神の目に自分がどのように映っているのか、神の前に自分がどのような存在であるかということも分かっていないし、自分が死んだ後どうなるのかも分かっていないのです。だから、神との和解など必要ないと思っているのです。神との平和など私には必要ないと。目を醒まさなければいけないのです。なぜなら、生まれながらに人間は例外なく、神との和解を必要としているからです。神との平和を得ることが大切なのです。皆例外なく、生まれながらに神の敵であり、悪魔の子どもであり、そして、永遠のさばきに向かっている者だからです。

◎どうすれば神との平和を得ることができるのか？

ローマ5章に戻って、1節で「神との平和」を持っていると言いました。では、その平和はどうして得ることができたのでしょうか？「信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによっ

て、…」とあります。「**信仰によって**」、「**主イエス・キリストによって**」と、どこにも私たちの努力によってこのすばらしい祝福を得たとは書かれていません。これは一方的な神からの恵みです。神が私たち信じる者を救ってくださるのです。私たちの働きではありません。私たちの努力でもないのです。ですから、みことばのどこにもそのように記されていないのです。なぜなら、罪によって破壊された神と私たち人間との関係を、私たち人間は自分の努力、力で修復することはできないからです。どのように努力しても私たちはそれを行なうことはできません。しかし、イエス・キリストによってそれが可能だということです。だから、1節に「**私たちの主イエス・キリストによって**」と記されているのです。イエス・キリストがそれをしてくださった、彼だけがそれを行うことができるのです。父なる神と私たち罪人である人間とのこの壊された関係を修復できるのはイエス・キリストしかいないのです。この方だけが私たちの間に平和をもたらしてくださるのです。だから、イザヤは言いました。イザヤ書9：6「**ひとりのみどりご**が、**私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。**」、このすばらしい祝福は神が私たちに与えてくださるものです。では、人間にできることは何でしょう？聖書が私たちに与えてくださる真理を心から信じることだけです。私たちは自分で救いを得ることはできません。神が示してくださる真理に対して「神さま、私はそれを信じます。」と言うのです。そのとき、神はその信仰に対して救いを与えてくださるのです。私たちに救いをくださるのはあくまで神なのです。そのことはもう皆さんよく存じのはずです。

もう少し1節で見ておきたいことがあります。私たちが何を信じるのかということは何度も話してきましたが、そのことに関してパウロはこのように言っています。「**私たちの主イエス・キリストによって**」と、イエスを信じることによって救いを得ると言いますが、イエスの何を信じるのでしょうか？パウロは「**私たちの主イエス・キリスト**」と記しました。イエス・キリスト、すなわち、救い主です。しかし、イエスは私たちの救い主であるだけではないのです。「**主イエス・キリスト**」と書かれています。つまり、私たちの主人であり、私たちの所有者なのです。残念ながら、キリスト教会の中にイエス・キリストを救い主と信じていても自分の主人としないという信仰の教えが入って来ました。しかし、聖書を見ると、そのようなことは教えられていないのです。イエス・キリストはすべての所有者であり、すべてのものの神であり、すべての主です。そして、イエス・キリストは私たちを救うために来てくださった唯一の救い主です。どうしてその片方で切ってしまうのでしょうか？イエス・キリストは神であり、イエス・キリストは救い主であり、そして、イエス・キリストは私たちを造り、私たちを所有するに相応しい方です。先ほども見たように、私たちは悪魔の所有物であるか、それとも、神の所有物なのか、そのどちらかです。中間はないのです。パウロは私たちに「**私たちはこのイエス・キリストを私の救い主、そして、私の主、私の主人、私の所有者と信じている。私も私の同僚たちもその通り**」と告げています。だから、私たちが考えなければいけないことは、私はそのようにイエス・キリストを信じているかどうかです。パウロが言ったように「**私はこのイエス・キリストを私の救い主、私の主と信じてこの方にすべてを捨てて従う**」と、そのように決心をしているかどうかです。この主を信じる信仰によって父なる神と私たちの関係が修復されるのです。イエスを信じるときに、神との戦いが終わるのです。そのときまで私たちは神と戦っているのです。

そして、みことばは私たちにこのすばらしい神の祝福は、私たちが義とされたときに、つまり、救われたときに与えられると教えます。平和は、信仰を持ったとき、神が救ってくださったそのときに、信じた一人ひとりに与えられるものです。そして、神が私たち信じる者に与えてくださった平和は恒久的なものです。この神との平和の関係が恒久的なものであるという証拠があります。一つは、イエスが与えてくださる救いが完全であるということです。イエスが備えてくださった救いが完全であるから、その救いによって得た神との平和の関係も、当然、永遠に続くものです。赦しは完全であり、赦しは永遠のものです。この神との間に築かれた新しい関係も永遠に続くのです。もう一つは、イエスが救われた一人ひとりのために祈ってくださっているという事実です。イエス・キリストの祈りはヨハネの福音書17章に記されていることは皆さんよくご存じだと思います。今、詳しく見る時間はないのですが、この17章の中にはイエス・キリストの祈りが記されています。大きく分けて、ヨハネ17：6－19にイエスはイエスとともにいた弟子たちのために祈っておられます。そして、後半の20－26節を見ると、そこには将来の弟子たちのために祈っています。つまり、それはまた、私たちのための祈りでもあります。イエスは私たちのことを覚えて、私たちのために祈ってくださっているのです。イエスが祈ってくださっているのだから、私たちがこのすばらしい祝福を、この救いを失うことなど有り得るのでしょうか？へブル人への手紙7：25には「**したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。**」とあります。クリスチャンの皆さん、主イエス・キリストは十字架にかかって死なれた後、三日後によみがえって、今も確かに、私たちのためにとりなしをしている、祈っていると仰うのです。また、Iヨハネ2：

1には「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護してくださる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。」とあります。すごいことだと思いませんか？イエスを信じて救われた私たちクリスチャン、神と和解をした私たち、そのような私たちのために主イエス・キリストは今も祈り続けてくださっているのです。しかも、私たちが罪を犯したときには私たちのことを弁護してくださると言うのです。あなたのあの罪のためにわたしは十字架で死んだ、この罪のためにもわたしは十字架で死んだと言われます。このようなすばらしい祝福を義とされた私たちは神からいただいたのです。クリスチャンの皆さん、感謝だと思いませんか？私たちは私たちが逆らってきた神と神のご厚意によって和解したのです。私たち自身は神と和解するために何もできませんでした。神が働いてくださって、神が和解の機会をくださった、神がそのチャンスをくださり導いてくださって和解を成立させてくださったのです。神との平和を持った者たち、神と和解した者たちだけが神の平安を持って生きることができるのです。

イエスはヨハネ14章でこのように言われました。14:27「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」、イエスはここで「わたしはクリスチャンたちにわたしの平安を与える」と言われました。ですから、イエス・キリストがこの地上におられたときに示してくださった平安、どんなことがあっても心騒がせることなく歩まれたあの平安を、イエス・キリストを信じる私たち一人ひとりのクリスチャンに与えると神が約束してくださったのです。その平安を持って私たちは生きることができます。パウロはピリピ人への手紙の中で「そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」(4:7)と言っています。

今、みことばを通して学んで来たように、神の恵みによって罪赦された私たちは神との平和を得ました。神との平和を持っている者は神の平安を持って生きることが出来ます。このような約束を神が私たちにくださり、このようなすばらしい祝福を私たちクリスチャンにくださったのですが、問題は私たちがその平安を持って日々を過ごしているかどうかです。そこに私たちの問題があるのです。私たちはすぐに神のせいにしようとするかもしれません。でも、神は聖書のみことばを通して明確に「あなたにわたしの平安を与えた」と言われます。では、どこに問題があるのでしょうか？ピリピ4:6-7「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」、「そうすれば、…」、これは条件です。「人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」、つまり、日々の生活においていろいろな問題を経験する私たちが、その問題を神のところに持って行かないで、自分で解決しよう、友だちに解決してもらおうと、もし、そのようにするならこの神の平安はあなたには与えられないというのです。あなたの心はずーと騒ぎ続けていると言うのです。そのような経験はありませんか？皆が往々にして言うことは「だって神に祈ってもすぐに答えが来ない。それなら、信頼できる友に話した方が早い」と。だから、本当の平安はもらえないし、いつまで経っても信仰は成長しないのです。なぜでしょう？どこに問題があるのか分かるでしょう？あなたは聖書の知識はあるのです。でも、実践していないのです。だから、神の言われていることが本当に心から確信して事実だというその確信がないのです。答案用紙を回されて答えなさいと言われたら、全部書くことができるかもしれません。知っているからです。でも、知っているということと、それを生きているということは全然別の問題です。どうですか、皆さん？救われたあなたに神がくださった祝福とは、私たちが神の平安を持って生きることができるということです。だから、世の中の人たちは自分たちにはないものをそこに見るのです。どうしてこの人たちはそのような平安を持って生きるとか、皆不思議に思うのです。そして、そのカギは神との和解、救いなのです。救われた人にそのようなすばらしい祝福を神は約束してくださったのです。

それなら、救われた私たちがその祝福を持って日々を過ごしていないなら、どのようにして神を証できるでしょう？また、どのような神を証できるでしょう？神は私たち信じる者に神の平安を与えてくださった、それが約束です。ところが、もし私たちがそれを日々の生活で経験していなければ、それは私たちの歩みのどこかに問題があるのです。みことばはどうすれば良いのかを教えてください。「何も思い煩わないで、」と、すべて神のところに持って行きなさいと言います。「あらゆるばあいに、感謝をもって」祈りささげなさいと。なぜ、感謝するのですか？そのように神が命じておられるから、そして、私たちがもって行くところは一番良い解決をなしてくださる神のところだからです。私たちが他のところにもって行くのは、その解決の方が神の解決よりも良いと思っているからではないですか？クリスチャンの皆さん、それを止めなければなりません。あなたの信仰生活において、あなたの信仰が成長して行くために必要なことは、神が言われたことを実践することです。

ある人はこのように言いました。「私たちクリスチャンはもっともっと神に祝福を求めなければいけな

い。そのように本は教えている」と。私はそれは大きな間違いだと言いました。どんなにその本がベストセラーでも、皆さんも手にされたかもしれませんが、どんなに世界中で売れていようと、それは聖書が教えていることと違うのです。聖書が言っていることは、神は私たち信仰者に最高の祝福をくださったということです。問題は与えられているものに気付いていない私たちです。どんなに大きな愛で愛されているのか、気付いていないのは私たちです。どんなに大きな恵みを与えられているのか、気付いていないのは私たちです。それでいて私たちは責任を神に転嫁するのです。「神さま、あなたがもっと祝してくれないからです」と。とんでもないことです。私たちクリスチャンは、このように神が教えてくださっていることを見て、このような祝福をいただいていることを感謝し、そして、神が教えてくださることに、神のあわれみによって従って行こうとするのです。「**そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。**」、神の平安が私たちを満たしてくれるのです。こんなにすばらしい祝福をいただいているながら、あなたはなぜそのように生きていないのですか？神との平和、このような大きな祝福を神は信じる者に与えてくださるのです。

2. 神との交わり 2節

二つ目に、2節でパウロが言っているすばらしい祝福は「神との交わり」です。2節「**またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、…**」、神との交わりのことです。この「**導き**」という名詞を見てください。これは「近寄る、接近する」という意味です。このことばは新約聖書の中に3回しか出て来ません。この箇所とあと2回はエペソ人への手紙の中に出て来ます。一つはエペソ2：18「**私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。**」、「**近づくことができるのです。**」ということばです。もう一つはエペソ3：12「**私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができるのです。**」ここにも「**近づく**」ということばがあります。それがこのローマ5：2で使われている「**導き**」ということばなのです。2節では「**導き**」と訳されていますが、これは「近寄る、接近する」という意味です。つまり、ここで言われていることは、私たち神の恵みによって救われた者は、この聖なる神の前にいつでも自由に出入りすることができ、いつでも神と面会することができ、この方に接見することができる、そのような祝福を与えられたということです。

このような祝福は旧約聖書の人々にとっては理解しがたいことでした。旧約聖書の中にモーセがシナイ山に上っているときにこのようなことを主がモーセに告げられている箇所があります。出エジプト記19：21「**主はモーセに仰せられた。「下って行って、民を戒めよ。主を見ようと、彼らが押し破って来て、多くの者が滅びるといけない。」**」、人々が主を見ようとしてやって来て彼らが滅びると言います。つまり、神の前に立つのには条件があったのです。神の前にいつでも自由に出て行くことはできなかったのです。でも、私たちクリスチャンに神はすばらしい祝福をくださいました。いつでもどんな時でも神の前に立つことが許されたのです。「**ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。**」（ヘブル4：16）、このようなすばらしい祝福を神は私たちに与えてくださいました。私たちはこのような特権を神から与えられたのです。クリスチャンである皆さん、その祝福を皆さんは楽しんでおられますか？喜んでいますか？私たちはどんな時でも神の前に立つことが許されています。自由に神の前に出て、自由に神と話すことができるのです。私たちの重荷を自由にもって出ることができるのです。旧約の人々には理解ができませんでした。でも、イエス・キリストのみわざによって、その救いを信じた私たち一人ひとりにこのすばらしい祝福が与えられたのです。そのことを忘れてはならないとパウロは教えているのです。

最後に、クリスチャンの皆さん、今日、私たちが見て来たことは、私たち信仰者に神がくださった恵みは、神に逆らっているこの世の人たちが絶対に得ることのできない祝福であるということです。神との平和をもった私たちは神の平安をいただきながら、それを経験しながら、日々を歩むことができるし、しかも、私たちはいつでも神の前に立つことができます。そのことをただ喜ぶだけでなく、そのことを実践しながら生きておられますか？こうして私は神とともに毎日歩めるのだ！どこに行こうと神が私とともにいてくださるということ喜びながら、その神と交わっておられますか？この関係は一時的な関係ではありません。これは永遠に続くのです。永遠に私たちはこの方を誉め称え続けて行くのです。なぜなら、この神の祝福は信じる一人ひとりに与えられた永遠の祝福だからです。

私たちはもっと神に感謝するべきです。私たちはこのすばらしい神をもっと称えるべきです。私たちが何かをしたからではありません。神が一方的にこんな罪深い私たちにこのような祝福をくださったのです。パウロはそのことを知って、そのことを感謝し、そして、この神に従い続けるのです。2節の最後に「**神の栄光を望んで大いに喜んでいます。**」と言っています。私たち信仰者はこの栄光の神のために生きます。なぜなら、私たちの周りには、このようなすばらしい神がおられることも、この神が神と私たちの壊れた関係を修復してくださるといふことも、この神の平安をいただいて生きることができること

も、そして、全能の神の前に自由に立つことができる、そのようなことを知らずに、今、永遠の滅びへと向かっている人々がいるからです。そのために私たちは語らなければいけません。そのために私たちはみことばに添って生きて行くのです。平安をいただいた者としてみことばを実践するのです。神が皆さん一人ひとりを使ってくださいるように、そして、皆さんを使ってこのみことばに私たちの人生の答えがあることを、一人でも多くの私たちの愛する者たちが知ってくださいるように、そのことを願って、皆さん、みことばに従ってください。